

ISSN 0910-2396

野鳥友刊

—北海道—

第 74 号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 昭和63年12月21日



クマガモ 1987. 2. 10 小樽 撮影者 山田 良造

「私の探鳥地」 ⑩

「豊平公園緑のセンター」

戸津 以知子

かつての林業試験場跡地が現在の豊平公園緑のセンター(7.4ha)で近くに36号線が走り、静かな森林……と言った所では有りませんが我家からは自転車で5~6分の所なので双眼鏡一つを持って私は気ままな鳥見にしばしば足を運んでいます。どのコースをどう歩くと云う事もなく、鳥の声のする方、花の咲いている方へ自然に足が向くといった、至って気軽に「ミニウォッチング」の出来る所です。

ヒヨドリ、シジュウカラ、ハシブトガラ、アカゲラ等の留鳥はだいたいいつも見る事が出来ます。花もとても綺麗ですし、狭いながらも針葉樹林、白樺、カラマツ、カツラ、エンジュ等の大きな樹林が公園の中に適当な間隔で配置されているせいか、木に止まっている鳥の姿を比較的簡単に見る事が出来ます。キビタキ、オオルリ、センダイムシクイ、メジロ、コサメビタキと言った夏鳥、又イスカ、ツグミ、キレンジャク、マヒワ等の冬鳥を見る事も出来ます。街?の中だけに森林よりも早く姿を見せ、結構遅くまで居る様に思いました。一昨年マヒワ、ベニヒワの300羽近くの群に偶然出会った時、ルリビタキ(オス2メス3)を公園内で見た時は感激し、数日間プロミナを持って毎日通う羽目になりました。どの鳥も各々園内の同じ場所に数日間は居る様で、ごく真近で愛らしい様子が見れるのも楽しいものです。

キクイタダキとヒガラが戯れる針葉樹林帯も見本園らしく小規模なので実によく観察出来ますし、ミソサザイが温水プール横にある公園の石段の上に、例の尾を上にしたスタイルでちょこんといたり、思い掛けない出会いにうれしくなります。時にはオオルリとキビタキの追いか

かけっこなども見られ、どちらに応援する訳にもいかず、しばし鳥の世界を眺めています。春先にはオスばかりが目についたオオルリも9月末から10月初めには数がふえメスも幼鳥とおぼしきものも数羽

が飛び交い、一生懸命、餌を探すと云った光景に出合う事もあります。冬は餌台を作りコースもついている様ですがスキーがなければ無理の様で行った事がなく、今度一度行って見ようと思っている所です。

しかし最近、囲りにマンションの波が押し寄せ、又公園内もすっかり綺麗に整備され、下枝が払われ、積み上げられていた枯葉は、取り除かれ、赤い実をつけていた灌木もいつの間にやら見あたらなくなると云った具合で雑々とした中にはほんのりと自然の臭いの残っている所が気に入っていた私は、そのせいか公園内で見られていた留鳥の種類も以前に比べ少なくなって来ている様でこの所、行くたびにがっかりしてしまいます。園内をひと回りしても30~40分くらいで廻れますので短時間での「バード&フラワーウォッチング」を楽しんでいます。寒い時には緑のセンター内の温室で(月曜日休館)花を見ながら暖を取る事も出来ます。

85年4月以降見られた鳥

トビ、ハイタカ、チゴハヤブサ、キジ、キジバト、カッコウ、アカゲラ、オオアカゲラ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、キレンジャク、ヒレンジャク、ミソサザイ、ルリビタキ、クロツグミ、アカハラ、シロハラ、ツグミ、センダイムシクイ、キクイタダキ、キビタキ、オオルリ、コサメビタキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、キバシリ、メジロ、アオジ、アトリ、カワラヒワ、マヒワ、ベニヒワ、ギンザンマシコ、イスカ、ウソ、イカル、シメ、スズメ、コムクドリ、ムクドリ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト(以上49種)

位置 札幌市豊平区豊平5条13丁目

交通 市営バス南57番(札幌駅又は大通西1丁目)乗車、八条中学前下車

中央バス東80~88、60~64、70(東急デパート・市民会館よこ)乗車、豊平電話局前下車

概況 広さ、豊平公園7.4ha、緑のセンター3.7ha

●緑の相談所(691㎡)

●緑の相談コーナー

●講義室(72㎡・60人)

●ガラス展示室

(延床面積250㎡)

●みどりの図書室

(ビデオもあります)

①針葉樹見本園(3,400㎡)

②庭園見本園(8,000㎡)

③樹木園(7,400㎡)

④生垣見本(延長約1km)

⑤花木園(3,700㎡)

⑥野草園(1,900㎡)

⑦池(530㎡)

⑧自転車置場(100台)

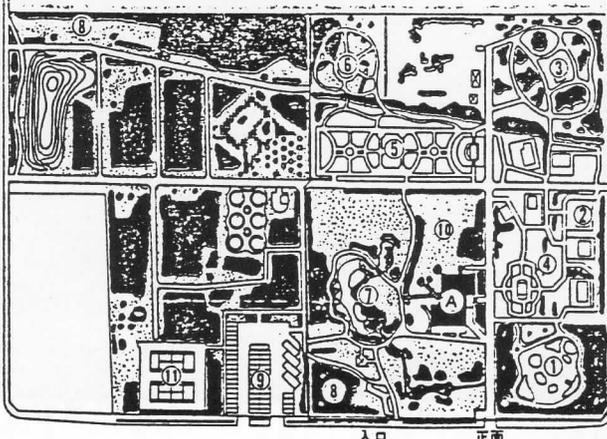
⑨駐車場(バス4台、小型50台)

⑩管理温室(60㎡)

⑪テニスコート(有料)

豊平公園7.4ha

豊平公園緑のセンター3.7ha



〒062 札幌市豊平区旭町4丁目1-14

探鳥旅行

羽田 恭子

道東へ

「エトピリカが観たい。霧多布と一緒に行きませんか。」と、竹内氏。「何時？」と私。「8月初めしか休みが取れない。」「本当は、もっと早い方がよいけれど、まあ8月20日頃までは観られるはず」と、私。

エトピリカと、チシマウガラスと、コシジロウミツバメと、アカアシギが目的という。かくして道東は初めてという、若い竹内氏と見延氏と三人の探鳥旅行となった。一見すると、二人の孝行息子が母親を、いや祖母をドライブに誘ってくれている図である。

8月2日早朝、霧がかかり赤い太陽の札幌を出発。苫小牧高速を降り、やがて鶴川町に差しかかる。三日前、7月30日に、鶴川干潟で、竹内氏と夏羽の真赤なヘラシギを一緒に観た話を、見延氏を羨やましがらせる。でも今は鶴川干潟に立ち寄る暇はない。心はずでに、道東に翔んでいる。沙流川の流れを見ながら日高路へ。

274号線は高速ではなかったはずなのに、車が勝手に日高高速をつくる。心は、エトピリカ、エトピリカと、食事の時間も惜しんでハンドルを握る。長時間の運転だから、昼食はドライブインでゆっくり休んでという私の提言も「うん」というだけで、実行に至らない。白糠駅でトイレタイムの外は、ひた走り。旧釧路川でキアシギを観、藻散布や琵琶瀬でタンチョウを観るのに下車したが、あとは、もう少し、もう一寸と走り続け、札幌から〇ン時間で、13時45分には霧多布に着いてしまったのです。

霧多布はその名の通り霧の名所。この日はすごい寒風とガス。これが8月真夏の気温とはとても思えない。鳥見には決してよい条件ではない。オーバースボンを2枚も穿いて、持参した上着を全部着込んで岬へ。

去年観たエトピリカの巣穴を凝視するが、それらしい動きは全くない。オオセグロカモメが騒ぐばかりである。その上、とても寒い。時折り乳白色の海霧が立ち込めて視界を遮る。到着してからすでに2時間は経っているのに、エトピリカは現れない。これまでは、2時間も待ったことはないのに……寒さと飢えて（そうだ。昼食をとっていなかったのだ。）若い二人は、だんだん口数が少くなる。こちらは何度も観ている余裕で、「まあ仕方ない。鳥には羽があるんだもの」という気分だが、不機嫌になってくる二人の心中が分かるだけに、気の毒で、一刻も早く現れてほしいと思う。



3時間も待った頃、「これでエトピリカが観れたら、暖くなるのになあー」と、二人の口からホソネが出た。入れ替わり岬を訪れる観光客も、あまりの寒さにすぐ退散。到着してからも、そろそろ4時間になろうとしていた。こうなったら明日の午前に賭けよう。午前の方が鳥の動きもよいはずだからと思っていると、海上を観ていた竹内氏が、アアアと、声にならない声を出す。みると海上から真正面に、ゼンマイ仕掛けの玩具のようにエトピリカが飛んでくる。短い翼をばたつかせ、頭上を一周し、巣穴には入らず海上に降りた。4時間待ってやっと現れた貴重な1羽。波に乗って遠く近く漂うエトピリカを、スコープで凝視する二人。今までの寒さも空腹も忘れた感動の一瞬。目的を達した後は、宿への足どりの軽いこと。

宿の夕食は二人にとって、最高に美味しかったに違いない。みると宿のご主人の、ダウンジャケットが壁に掛けてある。この地は夏でも日によって、ダウン着用というこたらしい。

夜は、コシジロウミツバメを観に行く。夜霧の中から切れ切れに聞えてくるユーモラスな声。強力ライトに捕えたコウモリのような飛翔。角度がよいと、夜目にもはっきり腰の白さが目に入る。目まぐるしく、くるくると動き回る鳥影。何時まで観ても見飽きない。

翌3日は、落石にチシマウガラスを探しに行く。今年は、ユルリ、モユルリ島では営巣しているが、落石では営巣していないという。相当幸運に恵まれないと、ご対

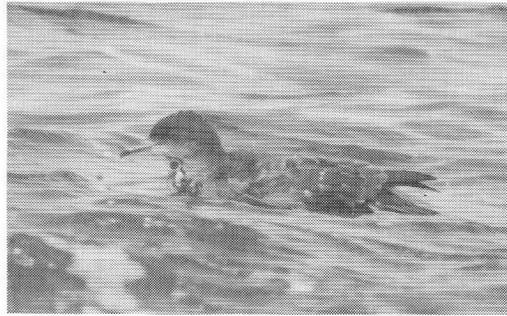
面はむつかしそうだ。

ロラン局側のササを掻き分け、崖地を見下し、海上を眺める。ケイマフリ、ヒメウはよく現れるのに、チシマウガラスの姿はない。しかし、昨日と打って変わった暖かさ。海上は穏やかで海霧もない。まあ、待つのも技術のうちと、ササに腰を下ろす。動く物を凝視しながら2時間は経った。そろそろ場所を移動してみようと、腰をあげかけた時、目の前を横切った鳥影。「あ、今のあの赤い顔は、チシマウガラスだ。間違いないと思うよ。あの岬の陰だわ」と、慌ててササ原を駆け上る。高みからみる崖に、いました。いました。運よくヒメウの営巣している近くに止っている。ヒメウとの比較もよく出来て、第三の目的を達したのです。

次の日は、野付でアカアシシギに挑戦。これは待つ間もなく現れた。簡単に観てしまうと、4時間も、或は、2時間も待って、やっと観ることが出来た鳥の方が、感動が深く、価値あるように思えてくるから不思議です。どの鳥でも、最初にみた時の印象が強いものだが、特に寒風と空腹の中で4時間待って現れた、ゼンマイ仕掛けの玩具のようなエトビリカは、二人にとって絶対忘れられない鳥でしょう。

道東の旅では、タンチョウの優雅な姿も十二分に堪能しました。藻散布の湿地をゆったり歩むタンチョウ、琵琶瀬の展望台からみる、広大な湿原の遙か彼方の白い点。夢中で採餌する春別川河口のベア。温根沼の葦原に見え隠れするタンチョウ。手の届きそうな距離で、その大きさに改めて驚ろかされた野付のタンチョウら等々。何処で観たタンチョウも、雄大な自然にマッチして、絵になる風景でした。

この季節、シギチには少し早いと思われたが、風連、野付、涛沸、能取、サロマ、コムケの干潟でみたシギ達も印象深いものでした。ついこの春に北帰したシギ達が、早くも夏の干潟に現れていることに感懐を覚えました。まだ、キアシシギ、タカブシギが主ですが、コチドリ、メダイチドリ、キョウジョシギ、トウネン、ヒバリシギ、ハマシギ、アオアシシギ、イソシギ、ソリハシギ、オグロシギ等も、数は少ないながら観ることが出来ました。



ハシボソミズナギドリ 62. 8. 20 コムケ湖 撮影者 竹内 強

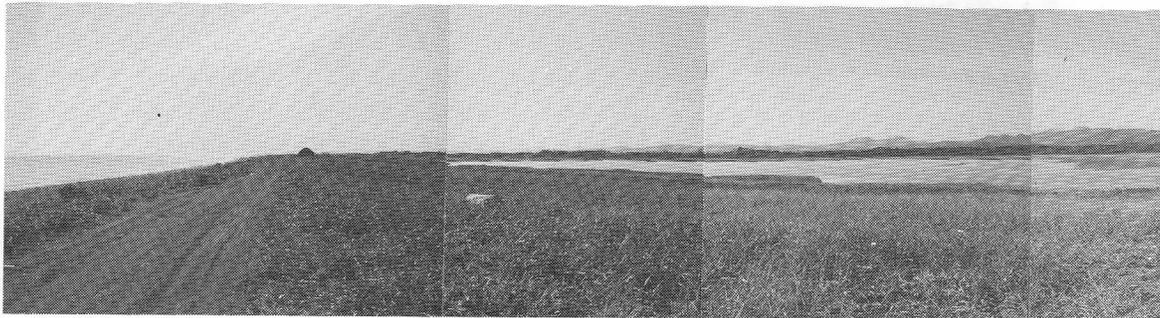
こうして、4泊5日、1500Kmの道東の旅は、目的を達し、満足のうちに終わったのです。

コムケ湖へ

オホーツクの海を見たいという夫と、コムケの鳥が観たいという私は、9月1日、JRで湧別へ。遠軽で乗り替えるあたりから小雨が降り、車窓に見える木々の葉も、大分揺れている。この分では、今日のコムケの鳥見は無理だ。

湧別の宿に着いてから、探鳥はやめて町や港をみることにする。大きなビルを見馴れている目には、せいぜい二階止りの家並みは、威圧感がなく心が安らぐ。ここもご多分に漏れず外観が立派なのは、町役場と学校だ。それに漁協と。港は防波堤に高波が打ち寄せ、白い飛沫が何mもあがる。カモメの類も、じっと風雨に耐えている。町に引き返す途中に、小さな無人の湧別駅をみる。時刻表には一日二便しか記されていない。名寄本線の枝別れた湧別—中湧別間の盲腸のような線である。やがて廃止の運命にある。小雨の中一巡しただけで、町がすっかり分かったような親しみを覚える。郵便局も漁協も、マーケットもすぐ分かるところがよい。

翌2日は、幸い雨も上がり、コムケ湖に行く。風がやや強く、オホーツクの海には白い波頭がみえる。小鳥の群れが海岸線に沿って波頭すれすれに飛んでくる。100羽はいるようだ。鳥は一斉に反転する。きらりと白い下面が光る。アカエリヒレアシシギだ。やがて目の前に着



湧別へ

コムケ湖

水する。波頭の上でアカエリヒレアシギは、まるでサーフィンを楽しんでいるように見える。パッと海面から一斉に飛び立つと、湖の干潟にやってきて忙しげに採餌する。干潟では大小のシギやチドリが採餌に余念がない。

見渡す限り鳥がいる。何処から観てよいか分からないくらい鳥がいる。識別し、数を捉むのに忙しい。そのうち、ピピピピとチュウシャクシギの声。見上げると、一本の真直な竿になってチュウシャクシギが頭上を飛んでいる。120羽はいる。降りてほしいという願いも虚しく、高度を保ったまま南へ消え去った。「すごい数だったね」と、二人で顔を見合せていると、又、ピピピの声。120羽で驚ろいてはられない。今度は、先程の何倍の長さだ。鉤になって頭上を渡る。双眼鏡の視野からはみ出す。慌てて肉眼で数える。50、100、150、200…400。「400はいるよ」と、叫ぶ。チュウシャクシギの鉤の鈍角の部分が、ばらばらと崩れた。あ、降りると思う間もなく、高度を半分まで下げたチュウシャクシギであったが、忽ち隊列を組み直し、何事もなかったかのように元の鉤形になる。

そして、先程よりは、ずっと鋭角の鉤になって、どんどん遠ざかる。でもまだ双眼鏡の視野に入っている。まだみえる。まだ見ると、小さくなる鳥影を追う。一体あれだけの数は、何処へ降りるのだろうか。能取か、濤沸か、いや一気に本州まで行ってしまふのだろうか。鉤形の両端を残し、真中の半分が、ばらばらと逆落しになりながら、あっという間に元の鉤形に納まる様は、雁でしか見たことのなかった光景だけに、私には新たな発見であった。

二人は、「すごい。すごかった」と、いう言葉しか出て来ない。この日は、まだ45の群れ、200の群れ最後に2羽と、干潟に降りていた4羽を加えて、771羽のチュウシャクシギを数えたのです。これ等の饗宴をみているうちに、最初から干潟に降りていた4羽が気になった。仲間の声に誘われて飛び去ったかと干潟を見回すとやはりこの4羽は飛び去らず残っていたのです。

この日のチュウシャクシギの情景は、今思い出しても興奮してきます。多分に見落しもあると思うが、この日

みたシギは18種、メダイ100±、ムナグロ250（上空通過）ダイゼン3、トウネン100±、ハマシギ70±、コオバシギ2、オバシギ3、ヘラシギ3、エリマキシギ4、キリアイ2、アオアシシギ2、キアシシギ1、イソシギ1、ソリハシシギ3、オグロシギ58、オオソリハシシギ17、チュウシャクシギ771（4、120、400、45、200、2）アカエリヒレアシギ270（100、50、30、50、40、70）などでした。シギチの外には、アオサギ、コウノトリ、マガモ、コガモ、トビ、オジロワシ、ハヤブサ、ユリカモメ、ウミネコ、キジバト、カワセミ、ヒバリ、ハクセキレイ、ノビタキ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、シメ、ハシボソガラス、ハシブトガラスを記録しました。

又、コムケでは8月20日、ハシボソミズナギドリが（写真参照）海岸近くで観察された。9月14日には、クロトウゾクカモメが、その名の通り、アジサシを襲うのを観ました。

今秋はコムケに5回行ったうち、9月2日のチュウシャクシギが最も印象的でした。しかし他の日も、常に期待を裏切らない、すばらしいコムケ湖です。

尚、コムケの野鳥については、地元の熱心な観察者、大館和広・大塚恭司・藤田司、三氏の報告があります。

伊良湖岬へ

秋、空気が澄んで青空が高く感じられるようになると、心は、あの岬へと飛ぶ。サンパの渡りを観に伊良湖岬に通い出して、今年で9年目。当然当り外れはあるが、鷹の渡りは誠に魅力的だ。

最初の年、昭和55年、飛行機が名古屋空港滑走路に着陸した時、飛行機の風圧を感じてか、一斉に草地から舞い上がった50羽程のケリの姿。黒・白・茶のコントラストも鮮かだ。北海道では、ほとんどお目にかかれない姿に、ああ、これを観ただけでも来た甲斐があったと、感激したものだ。目的の鷹の渡り以前に、ケリの飛翔に満足したのです。その後毎年空港では、窓外を凝視するが、あの時以来、ケリの大群をみかけない。もっとも飛行場では鳥の大群は大敵ではある。

今秋は10月1日札幌を発つ。夕方には伊良湖岬に到着。



オホーツク海

紋別へ（福岡研也氏撮影）

「よい時に来ましたね。今年は雨続きでやっと今日から飛び始めたのですよ。この天気なら明日は、きっと沢山飛びますよ。」と地元の方々が笑顔で迎えてくれる。

翌2日は、暗いうちから民宿の屋上で鷺鷹の飛来を待つ。東の空が、いくらか明るくなって来る。まだ確とは見えない薄明りなのに、「ほら、来ましたよ。」の声。本当に驚くほど目のいい人がいるのです。一年振りに観る軽やかなサンバの飛翔。向いの宮山の上から、東のビューホテルの陰から、続々と湧くように現れ連続と続く。あ、大型の鷹が混る。ハチクマだ。続いて右にも少し後ろにも。三羽共色が違う。茶色型、白色型、黒色型と、同じ種類の鳥と思えない程色彩の変化がある。

この地で、15年以上も鷺鷹の調査をしていらっしゃる辻先生は、黙々とカウントを続ける。何時何分、何羽と、克明に記録している。サンバの中に混る小型のツミヤハイタカ、時に現れるノスリ、ミサゴ、オオタカ、ハヤブサ、チゴハヤブサ等も、絶対見落さない。どの角度からでも、確実に識別されるのには恐れ入ってしまう。

続いていたサンバが一寸途切れる。見続けた緊張から開放される。朝から700羽くらいは飛んだだろう。「又、来ましたよ」の声に振り向くと、サンバが相当な密度で飛んでくる。上昇気流を捉えたのか頭上で旋回をはじめ。いわゆる鷹柱である。だんだん高度を上げる。そのうち1、2羽が西を差して流れていく。続いて鷹柱は解けて流れて、青空に吸い込まれていく。この日は、こんなことの繰返しでサンバは3400羽を数えた。ハチクマも71羽、最高のショーに遭遇した一日であった。翌3日もサンバは2130羽、4日・2500羽と、今秋は10月初めに渡りが集中していたようだ。

10月の伊良湖岬は好天だと、まだ暑い。3日目ともなると、見続けている目はチカチカ、頭はクラクラして集中力がなくなってくる、気分を変えるのに汐川干潟に行こうと思ったが、「今朝寄ったけど、シギチはさっぱりいませんよ。アオアシシギが2羽だけ」という地元の話で、毎年行っている汐川行きを止める。

ここは鷺鷹だけでなく小鳥類も渡る。帯のように続くヒヨドリ群れ。300、500という群れが騒がしく通る。高くキラキラと団子状の白い固まりは、コムクドリだ。中に少し大きいムクドリも何羽か入っている。メジロの群れが、チーチーと声を落して通り過ぎる。カケスが、ふ

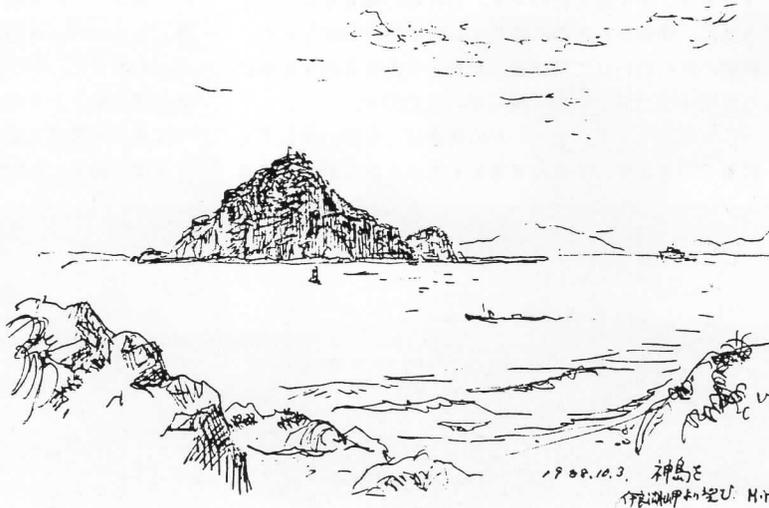


わふわ、だらだらと飛んで行く。ツバメが無数に飛び交い、中にコシアカツバメや、ショウドウツバメもいる。サンショウクイの声が高い空から降ってくるが姿は見えない。飛翔力が強く、風に乗ると長距離の渡りをするという、美しい蝶、アサギマダラも、ふわふわと目を愉しませてくれる。

日が西に傾いて、三島由紀夫の小説(潮騒)の舞台になった、神島の燈台に明りが点る頃、ハクセキレイが30、50、と飛び交う。12時間以上空を見上げていた一日も、そろそろ終わりだ。茜色の雲も刻々と色彩を変える。裏山からゴイサギの群れが、一日の終わりを告げるかのよう、「グワー」と、飛び立った。

9年前、「えっ、タカ? そげんもんが、いっとかねー」と、双眼鏡で空を見上げる私に、不思議そうに方言で問いかけてきた、地元のメロン売りの小母さんも、ここ数年の鷺鷹ファンの賑わいに、今昔の感を深くしていることでしょう。

〒064 札幌市中央区円山西町3丁目3-26



1999.10.3. 神島
伊良湖岬の望む H.H

バードテーブルづくり

白 沢 昌 彦

現在の所に引越して来たのは、今から7年前になります。我が家は、藻岩山のロープウェーに歩いて10分とかららないところにありますが、家の前は人の往来が多い市道になっているため、バードテーブルを置いて鳥達はやって来ないだろうと、これまで設置していませんでした。しかし、木工細工が好きだったため鳥は来なくても良いから、置くだけ置いてみようと思いついたのは一昨年の晩秋でした。

まず、一般的な三角屋根のものでは、面白味がないし、まだ見たことのないような形のものにしようと思行燈風の四面の屋根をしたものを作ってみることにしました。作るに当たっては、鳥は丸い棒状のものの方が止りやすいだろうから、四辺に丸い止り木をつけてやろう、屋根は雪のことを考え急傾斜が良いのだが、体裁が悪くなりそうだから緩い角度にしよう。屋根の梁をどのようにして作るか、屋根のひさしは長い方が雪が入りずらくて良いのではないかと、エサ台の中の雪が溶けた時のために水抜きを作ろう、エサ台自体を地面にどう支えてやろうか、等々を考えて、工作用のメモを作りました。

メモをもとに作り始め、大まかな組立て材は物置きで切ったり削ったりしましたが、寸法の方は当初一応決めておいたものの、長いかなあとか短いかなあとかと思案し適当になってしまいました。組立ては、暖かい家の中で行い1週間くらいで第1号が出来ました。ところが雪が入りずらくなる様を考え過ぎてしまい、4本の支柱は余りにも短くなってしまい、出来上がりは失敗でした。壊すのももったいないし、かと言って他人に差し上げられるようなものでもないの、親のところにセットしてやりました。

初めの頃、鳥は来なかったのですが雪が降るようになってからは、カラ類をはじめ大型のカケスやヒヨドリもエサ台の中に入るようになり、私の方が驚いているくらいでした。でも、カケスを見ているとやはり狭いなあとい



う感じがする失敗作でした。

1台目の失敗作をもとに2台目を作りました。この時も作っている途中でいろいろ方針が変わりましたが、一応納得のいく形になりました。これ以後は、ほとんど同じパターンで、作る時間もだんだん早くなって来ました。一番めんどろなのは4本の支柱をきちんと垂直に組むこと、屋根の合わせ目を隙間なく合わせることです。

我が家のものは3台目のもので、最近作ったものとはほとんど同じ形になっています。これまでに8台作りましたが、これらは鳥には全く素人の人ばかりに差し上げており、それぞれ、野鳥が来るのを楽しんでいるようで、私も作り甲斐があったと喜んでいるところです。

ところで、我が家のバードテーブルの設置状況は、写真のとおりですが、やはり、やって来る鳥は少いです。

しかし、種類としては、大体一般的なものは来ているので、場所柄から考え十分だと考えております。

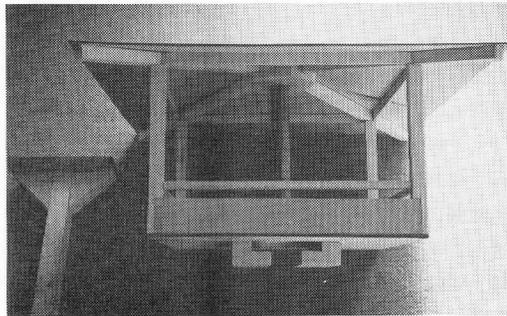
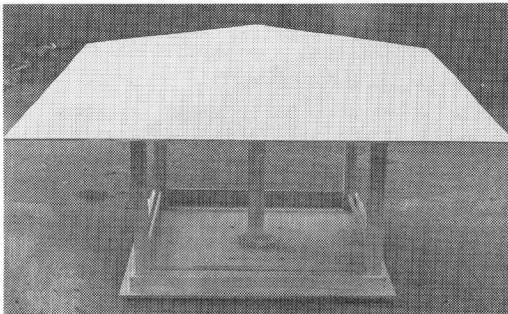
〔我が家に来た鳥たち〕

ヒヨドリ、スズメ、シジュウカラ、ハシブトガラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、コゲラ、アカゲラ、ツグミ（9種）

〔我が家のメニュー〕

パン、ヒマワリ、麻の実、青米、クルミ、銅鳥用の餌、リンゴ、柿（冷凍保存したもの）

〒064 札幌市中央区南17条西18丁目



給餌台に関するアンケート調査結果

昨年実施いたしました、アンケート調査の結果から、給餌台のことについて、お知らせいたします。

給餌台に関する設問は次のとおりでした。

設問1 給餌台を作っていますか、又は作ったことがありますか。□はい □いいえ

設問2 給餌台にどんな鳥が来ますか、来ましたか。印象に残った鳥を5つ以内で記入して下さい。

設問3 どんな餌をやっていますか、やったことがありますか。幾つか記入して下さい。

以上の設問に対し179名の方から回答をいただきました。

印象に残った鳥

順位	種名	回答数	順位	種名	回答数
1	シジュウカラ	72	10	ゴジュウカラ	27
2	ヒヨドリ	62	11	ハンプトガラ	20
3	アカゲラ	53	12	ヤマゲラ	16
4	カケス	41	13	ムクドリ	11
5	スズメ	38	14	カワラヒワ	11
6	ツグミ	37	15	ハイタカ	9
7	レンジャク	36	16	キジ	7
8	ヤマガラ	30	17	アトリ	7
9	シメ	29	18	ベニヒワ	6

まず設問1の給餌台を設置したことがあるかとの問いに対し、「はい」と答えた方は、なんと137名(71%)もおりました。この数字を見ますと、給餌台が、会員の中で如何に普及しているかが伺われました。

設問2の給餌台に来た印象に残った鳥については、表のとおり18種あり、順番としては、シジュウカラ、ヒヨドリ、アカゲラ、カケス、スズメと続いておりました。

ベニヒワを上げた方が6名おりましたが、珍ずらしい例と思われます。

設問3の餌の種類としては、次のとおり、かなりの種類があげられており、小鳥たちに対する愛情が伝わってくる感じがしました。

皆さんも、これを参考に、今冬は変わったメニューで歓待されてはいかがでしょう。

〔餌の種類〕

ヒマワリ、リンゴ、脂身、みかん、パン、混合飼料、御飯、めん類、冷凍トウキビ、生干トウキビ、冷凍オンコの実、ドングリ、サフラワー、ミルウォーム、サナギ(蚕)、麻の実、稲穂、ヒエ、柿、ジュース、クルミ、ピーナッツ、青米、スイカ、グレープ、エゴマ、ベーコン、クッキー、ウリの種子、カボチャの種子(砕いて)、ねり餌(小麦、ラード、砂糖)、アワ、玄米スープの残り米、アカザの実、玄米、ナナカマド、ハチミツ、砂糖水、飼鳥用のエサ

クロツラヘラサギの初記録の訂正とカラフトムシクイのバンディング

三 浦 二 郎

本誌第72号の表紙を飾った上ノ国町笹浪甲衛氏撮影のクロツラヘラサギについてのコメントで、本道初記録と書いたが、北大応用動物学教室の阿部永先生から「北大博物館に1956年11月6日大樹町で採集された標本が保存されている」との御指導を頂いたので、初記録の字句を訂正したい。

先生は多忙の中、わざわざ標本を検索されて下さり、7月28日付で文書を頂いたのだが、怠慢でこの訂正が次号発行に間に合わなかったことをお詫びする。

さてその埋め合せではないが、今年の秋は珍鳥カラフトムシクイを二度バンディングしたので報告する。(北海道新聞10月5日記事は一部誤りもあるので)

第1回目は、狩場茂津多道立自然公園自然環境総合調査の一環として、狩場高原(標高510m)で標識調査を実施中、9月24日メジロの群に混って捕獲された。

第2回目は、狩場高原の調査から帰って10日の10月4日、苫小牧樽前の調査地で捕獲放鳥された。これは単独個体として捕獲され、太平洋側としては日本初記録で、いずれも体重は6g強であり、概ねキクイタダキサイズである。狩場高原の個体は腰の黄色がより鮮明であった。(写真は樽前の個体)



〒059-12 苫小牧市樽前394-1003 樽前自然教育研究所

誌 上 写 真 展

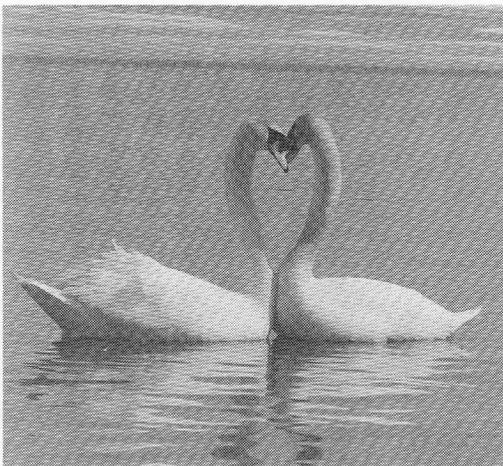
— 昭和 63 年度 野鳥 写真 展 から —



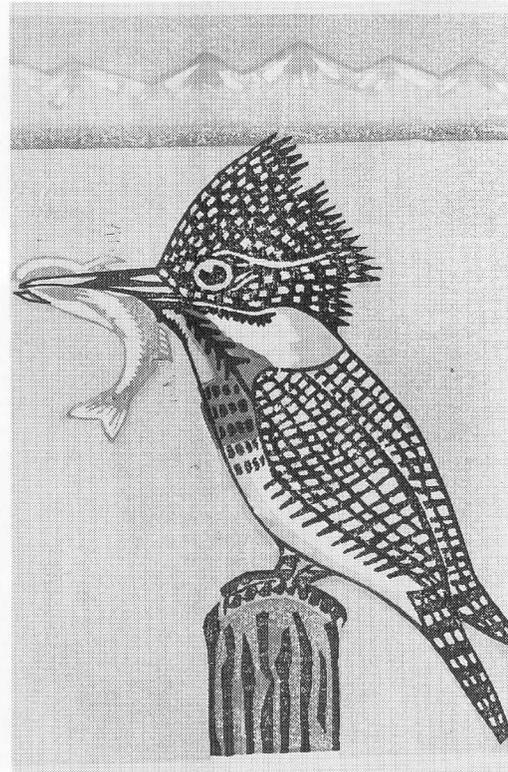
フクロウ 佐藤 康雄



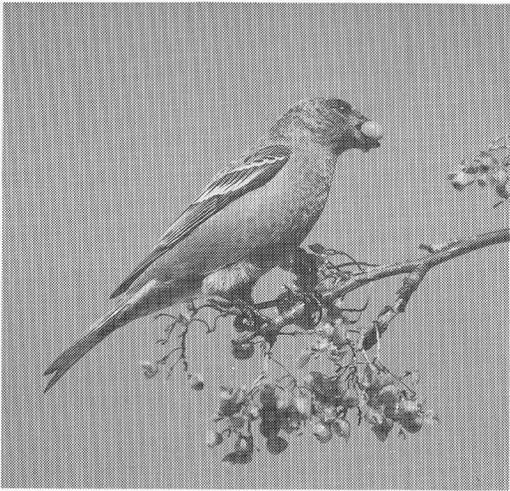
ミヤマホオジロ 田中 金作



コブハクチョウ 長山 義雄



版画 ヤマセミ 佐藤 勇



ギンザンマシコ 山田良造



ホオジロガモ 志田博明



オオセグロカモメ 難波茂雄



シノリガモ 早水藤二郎



ウミウ 白川勝雄



ヒシクイ 和久雅夫



鷓

川

63. 8. 28

井上公雄

7月3日以来暫く振りの例会である。札幌を出発する時ははっきりしない空模様だったので、今日の参加者数が一寸気がかりになっていたが、鷓川駅前には、顔馴染みや新顔の人達が次々集って暫く振りでの再会の喜びを語り合う事になった。

昨年秋に改築完成した鷓川の駅舎は仲々モダンな造りで、駅前の広場も整備され面目を一新していた。今夏のシギチの様子はどんなものだろうと先週、10余名の仲間と来た時は、やや低調であった。今日は例会で参加者も多いのだから、先週より良い成果を見せて貰い度い念いであった。

牧場の2つ目の柵を越えた所で、西側の離れた沼地を覗いて見た。此処はシギチが好んで集る場所の一つであるが今日は留守であった。

よし原縁や水面にアオサギが、たむろして居た。全体茶褐色の冬羽に衣替えしたノビタキが、牧柵に留ったり降りして居るのも見られた。

牧場の中を川に向かって歩いて行くと西側遠くの地面に動くものが居た。30羽余りのムナグロが、地面から餌を採って居る。中に少数のダイゼンも混って居た。ムナグロとダイゼンは、同じチドリの間で、大きさも姿・体色も良く似て居るばかりでなく、海岸河口近くの草丈の低い草地を好み、群れで行動することが多い。夏羽から冬羽へと換羽期に入り成鳥若鳥と体色が一定でない。川涘について見ると、先日の雨で増水、川原や干潟の部分が少なくなっていた。

上流から下流へと見渡して見たが肝心のシギチは居ない。下流に向かって移動しようとした時近くの中州に1羽のコチドリを見付ける。プロミナに入れた処を近くに居た人が交代で覗せて貰うのだが、地面の雑物に紛れ同化して見分けが付かない。何回も教えられ、見事な保護色に漸く納得。

1羽のコチドリにみんなが、すっかり釘付けにされてしまった。下流に移動を始めると対岸の突き出た小枝にベニマシコが留って鳴いて居た。其の周囲にカワラヒワ・ニュナイスズメの混群が戯れて居る。その延長線上の向う側の丘の斜面が薄紫の花のじゅうたんの様に美しい風景になっていた。

更に下流に歩いて行くと、細長くなった浅瀬の雑草の

中にキアシシギが1羽見え隠れして居るのが確認された。

次第に空模様が怪しくなり心配されていた雨が降り始めた。降雨確率50%の予報が当たったのだ。鷓川の探鳥会での雨は珍しい。此の雨の中ホウロクシギが2羽飛翔、オグロシギが観察されたが、雨のため観察が散漫になり少ないチャンスを生せなかったのが残念であった。

河口付近は増水のため様子がすっかり変り干潟の部分が少くシギチの姿はない。小降りの中を時々シギチが飛び回るのを追い続けるが仲々降りない。暫く続いた雨も次第に上り始めたところで食事にする。只でさえ湿った地面に雨上りである。落着ける場所の確保も容易ではなかった。

食事中近くの凹地でタカブシギが観察された。食後鳥合せの結果30種を数えた。其のうちシギチは11種(数も極めて少い)昨年に引続いて今年の鷓川のシギチは残念ながら低調と云う結果になった。

〒064 札幌市中央区南6条西11丁目 共済ハウス

63. 8. 28(日)曇り一時雨 10:00~12:50

〔記録された鳥〕アオサギ、トビ、チュウヒ、コチドリ、ムナグロ、ダイゼン、トウネン、ハマシギ、タカブシギ、キアシシギ、イソシギ、オグロシギ、オオソリハシシギ、ホウロクシギ、タシギ、ユリカモメ、オオセグロカモメ、シロカモメ、カモメ、ウミネコ、キジバト、ヒバリ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ベニマシコ、シメ、ニュナイスズメ、スズメ、ムクドリ 以上 30種

〔参加者〕矢野玲子、志田博明、羽田恭子、佐藤勇、佐川節子、川守田順吉、水島貴広、豊口肇・美代子、今野弘、堀内進、柳沢信雄・千代子、荒川真須美、榊川保・弘子、小堀煌治、戸津高保・以知子、田中金作・礼子、難波茂雄、佐久間順子、武沢和義・佐知子、佐藤辰夫、小岩、竹内強、西川喜久世、綿谷千冬、道川弘・富美子、石谷義一、巻勝良、丸山薫・かおり、大野信明、松井昌、井上公雄、香川稔、森田新一郎 以上41名

〔担当幹事〕大野信明、竹内強

鷓川の探鳥会に参加して

63. 9. 11

山田 紀栄子

この春、野鳥を見る楽しみを覚え、鳥との出会いを楽しんでましたが、真夏はどこへ行っても鳥の姿はほとんど見えず、物足りなさを感じておりました。

それだけに、この鷓川の探鳥会ではどんな鳥達に会えるか楽しみでした。

前日からの天気予報はあまり良くなかったので心配でしたが、当日は予報が大はずれで、風もなく絶好の探鳥会日和でした。

あちらこちらで、牛や馬がのんびり草を食べている広い牧場で、首からさげた双眼鏡では鳥がいるという程度にしか見えなかったのですが、会員の皆さんの望遠鏡を覗かせていただき思う存分楽しむ事ができました。

大きなホウロクシギから小さなトウネンまで、大小さまざまなシギ類、アオサギ、コガモなどはじめての出会いばかりでした。なかでも、目の前の水たまりで得意げに泳いでいたアカエリヒレアシシギは、両手ですくってみたくなる程かわいい小さなシギでした。

又、私達が近づいても逃げようともせず、長い口ばしを泥の中に差し込んで餌をさがしていたオオソリハシシギ。望遠鏡のレンズを通して見たら1枚1枚の羽の模様や顔の表情まではっきり見え、とても感激しました。

初心者の中には、どのシギも同じように見え、家に帰ってチェックリストをみながら本や図鑑で見比べ、確認した事が又、楽しく、もう一度あの鳥達に会いに行きたい

☆=====☆

とっております。

楽しかった夏鳥の季節が終りに近づきましたが、これからどんな冬鳥に会えるのか、ますます楽しみになりました。これを機会に野鳥愛護会に入会し、皆さんの仲間に入れていただきたいと思っておりますのでよろしく願い致します。

〒006 札幌市西区前田10条18丁目2-17

63. 9. 11 (日) 晴 10:00~12:30

〔記録された鳥〕アオサギ、コガモ、トビ、チュウヒ、トウネン、アオアシシギ、タカブシギ、オオソリハシシギ、チュウシャクシギ、アカエリ、ヒレアシシギ、ユリカモメ、オオセグロカモメ、ウミネコ、キジバト、カワセミ、ヒバリ、ハクセキレイ、ノビタキ、カワラヒワ、ハシボソガラス、ヒバリシギ、キマユツメナガセキレイ

以上23種、鳥合せ後・ホウロクシギ、オグロシギ、タシギ、ツルシギ、オオタカ、シマセンニュウ

〔参加者〕小堀煌治、竹内強、大西典子・尉仁、佐々木武己、清水朋子、矢野玲子、福岡研也、熊木良美、佐藤典子、難波茂雄、村野紀雄、柳沢信雄・千代子、山田義隆・紀栄子、羽田恭子、大野信明、佐川節子、国本昌秀、小林美智子、富川徹、高橋孝次・ひろみ、佐藤勇、岡田幹夫、堀内進、井上公雄、佐藤幸典、森田新一郎 以上30名

〔担当幹事〕富川徹、堀内進

探鳥会に参加して＝野幌森林公園＝

63. 10. 23 千葉 広

野幌森林公園には春・夏と十数回ほど訪れておりましたが、今の季節には初めてであり「どんな鳥たちを見るやら」と期待をしておりました。しかし、朝からあいにくの曇り空、風も強く昼ごろにはあられも降る悪天候の中3種類の鳥を確認出来るにとどまりました。

最後の鳥合せで20数種記録されたと聞き、まだまだ勉強不足だと強く感じたいです。

夫々の季節、天候、環境に応じ鳥の生態を考え、目だけで見るのではなく、さえぎりを聞き、そのしぐさを見、そして心をつくして探し求める事が本当の探鳥ではと、考えて今後も末永く続けて行きたいと思えます。

最後に、先輩諸氏の御指導ならびに「おさそい」宜しくお願いいたします。

P・S 見返り坂の紅葉とてもきれいでした。

〒063 札幌市西区二十四軒2条4丁目7-28-301

63. 10. 23 (日) 曇り 9:00~12:40

〔記録された鳥〕トビ、オオタカ、ハイタカ、キジバト、アカゲラ、オオアカゲラ、コゲラ、ヒヨドリ、ツグミ、クイタダキ、ハシブトガラ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、キバシリ、アオジ、カワラヒワ、シメ、カケス、ハシボソガラス 以上21種

〔参加者〕田辺至、青江正、佐川節子、今野弘、羽田恭子、清水朋子、千葉広、小林美智子、難波茂雄、志田博明・政子、佐藤勇、豊口肇・美代子、田中金作・礼子、大西典子、鎌田玲子、川守田順吉、高橋孝次・ひろみ、福岡研也・玲子、西論・早百合、榊川保・弘子、野坂英三、渡辺三重子、大野信明、森田新一郎、柳沢千代子、永島良郎、葦澤憲吉・ちよ・なは・まや、松井昌、巻勝良、竹内強、戸津高保・以知子、犬飼弘、霜村耕介、泉勝統、井上公雄、富川徹 以上47名

〔担当幹事〕柳沢千代子、井上公雄

ウトナイ湖探鳥会に加わって

63. 11. 13 森田 新一郎

バスの窓から見えた樽前山は美しい冠雪をみせていた。今日の空は青く高く、薄い筋状の白雲が流れ、快晴、微風。願ってもない小春日和である。湖面にあたる日光がキラキラと輝き、中洲の黄色く枯れた草も温い。

私たちバス組の4人はコースホテル入口で下車し、サンクチュアリー側から集合場所に行くことになった。

湖岸に入ると、直ぐに既に探鳥されているご夫婦から「コウノトリが来ています」と教えられた。初めて見るコウノトリに私の心は緊張した。集合地点には皆さんお集りで待っておられた。

私はこの夏に野鳥愛護会に入会させていただき、鶴川河口をはじめ、野幌森林公園、お誘いを得て大正池、鏡沼や宮島沼などの探鳥に参加させて頂いている。お陰で、先輩会員の方々と見知り合いとなり、探鳥会の場を通じて立派な方々にお会い出来、教を乞い、新知識を得られる。こんな素晴らしいことはないと思う。

初めの探鳥場所は、丁度ユリカモメが泳いで行った湖畔右手の草原。10坪に満たない狭いスペースの中に望遠鏡の放列。アメリカヒドリ1羽が他の水鳥と一緒に泳いでいるという。今日のリーダー堀内さんが「珍しい鳥ですからこの機会に是非みておいて下さい」とご案内された。私も幸いこの珍鳥を確認した。

この一時間、真剣な探鳥のあと湖畔に沿って移動し午らの任意の探鳥が行われた。手前の中洲の葦の中にコウノトリを再確認。近くにアオサギが3羽寄り添っている。

ウトナイの水に手をひたしてみる。案外つめたくない。小エビがいる。タニシの抜け殻がある。岸边には沢山の菱の実が打ち上げられている。ヒシクイの大好物の実だと教えられた。オオハクチョウの群はおのずと幼鳥を中

心に一家族ごとになっている。

昼食はこの群を前にした草地でとった。遠くに大群をなして飛んでいる鳥たち、白鳥の飛び立ちと着水。

「今日、コウノトリを見た」という感慨。私たちの頭上に舞っていたオジロワシが太陽の光の中に消えた。11時37分であった。ウトナイ湖探鳥会は、私にとってこの日も亦、充実した一日であった。

〒064 札幌市中央区北4条西16丁目

植物園プリンスハイツ901号

63. 11. 13 (日) 晴 10:00~12:30

〔記録された鳥〕アオサギ、ヒシクイ、オオハクチョウ、コハクチョウ、マガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、ホオジロガモ、ミコアイサ、カワアイサ、トビ、オジロワシ、オオタカ、ノスリ、チュウヒ、ハヤブサ、ユリカモメ、カモメ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、シジュウカラ、シメ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、コウノトリ、アメリカヒドリ、コバクチョウ、シギ 以上29種。

〔参加者〕成澤里美、森田新一郎、田中金作・礼子、今野弘、谷ロー一芳・登志、大西典子、山田紀栄子・健一、国本昌秀、野坂英三、道川弘・富美子、樹川保・弘子、大野信明、佐藤 勇、西 諭・早百合、渋谷信六・弘子、戸津高保、羽田恭子、鎌田玲子、堀内進、佐々木武己、志田博明・政子、高橋孝次・ひろみ、泉 勝統、清水朋子、山田良三、矢野玲子、佐藤典子、佐川節子、松井昌、井上公雄 以上39名

〔担当幹事〕堀内進、大野信明



〔野幌森林公園〕

昭和64年2月12日(日)

北国の冬を生き抜くことは、鳥たちにとっても、大きな試練です。やがて来る春に向けて、酷しい自然の中で、逞しく

生きて居る生命に、感動さえ覚えます。キツツキ・カラ類が中心の留鳥が多く、マヒワ・ウソ・ツグミ・日本の野鳥の中では最も小さいと云われるクイタダキ等限られた種類の観察になります。雪に覆われた森林公園を歩いて見るのも、良い自然体験になります。歩くスキーですと楽ですが、素歩きでも支障ありません。

大沢口駐車場入口 午前9時集合

〔円山公園〕 昭和64年3月5日(日)

朝夕の寒さは続いています、日中の陽差しは暖く、直ぐ其処まで春が近づいて来て居ることを感じさせます。

日照時間が、次第に長くなり、春の訪れを織った鳥たちの中には、もう囀りをはじめたものも居ます。南で越冬し、北へ向う旅鳥も姿を見せ始め、観察される種類も多くなりバードウォッチングを試みる人達にも、楽しさを経験する、良い機会になります。お昼で解散になりますので気軽に参加して下さい。

円山公園管理事務所前 午前10時集合

〔ウトナイ湖〕 昭和64年3月26日(日)

湖面の水も解け始め、暖い南で越冬して居たガン・カモメ類が、北を目差して渡り始め、此処ウトナイ湖、沢山集り、羽根を休めて居ます。多数のマガン・ヒシクイ・オオハクチョウ・オナガガモ・ヒドリガモ・マガモの中に、少数派のミコアイサ・カワアイサ・ヨシガモ等を探し出すもの楽しいものです。オオワシ・オジロワシと云った大型鳥も、ほぼ毎年観察されて居ます。防寒に気を配り、誘い合って参加して下さい。

ウトナイレイクホテル湖畔側 午前10時集合

(行)千歳空港発 9時10分 苫小牧行 道南バス

ウトナイ遊園地下車

(帰)ウトナイ遊園地 千歳行 道南バス

13:24 14:14

〔野幌森林公園〕 昭和64年4月16日・23日(日)

郊外ではヒバリが空高く囀り、森林公園の中にも、福

寿草・水菖菖・坐禅草の花が見られる様になっています。南で過して居た鳥たちも次々と帰って来ます。此の時期は鳥の姿も見易く、囀る鳥も多く、眼と耳を併せての観察に最も良い時季です。遠くオーストラリアから1万羽の長旅をして来たオオヅシギを始め、美しい囀りを林の中で聴せるアオジ・ウグイス、北へ渡りの最中のツグミ・マヒワ等、其の時にも依りますが、30種前後が記録されます。

大沢口駐車場入口 午前9時集合

〔野幌森林公園を歩きましょう〕

昭和64年4月9日(日)

大沢口駐車場入口 午前9時集合

いずれの探鳥会も、余程の悪天候でない限り行います。

昼食・(円山公園探鳥会は除く)筆記用具・観察用具・雨具等ご用意下さい。

探鳥会についての問合せは、011 551-6321 井上まで



◆新年懇談会の開催

新年懇談会を次のとおり行います。多数ご参加ください。

日時 昭和64年1月14日(土)

午後2時から

場所 札幌市婦人文化センター

(札幌市中央区大通西19丁目)

内容・講演：鳥類標識調査や愛鳥教育活動などでご活躍の三浦二郎氏に、鳥類標識調査で捕獲された珍しい鳥の話などをしていただきます。

・スライド映写：みなさんの持ち寄ったスライドを映写します。たくさんの方の参加をお待ちしています。

会費 500円

◆写真展の作品のご用意を

昭和64年度も野鳥写真展の開催を予定しています。

みなさんの自信作のご用意をお願いします。応募要領は、次号の「野鳥だより」でお知らせします。

これから撮影という方もまだ間に合いますので、奮ってご参加を！

◆名前、住所変更の時の届出について

結婚、転居などで名前、住所等に変更があったときは、届け出て下さい。だより等が届かない場合がありますので宜しくお願いします。できましたら、ハガキ等で、北海道野鳥愛護会宛で郵送して下さい。

◆ 私たちの探鳥会—探鳥会17年の記録—

72号でお知らせしましたがまだ在庫が多数あります。プレゼントなどにもよいと思います。どうぞ御申し込み下さい。

○連絡先 〒003 札幌市白石区栄通り8丁目3-11

柳沢千代子 電話 011-851-6364

○価格 会員1000円、非会員1200円、送料250円

○申込み 現金書留で送料と共に送金して下さい。

◆ アンケート調査結果について

(鳥民だより)

昨年、アンケート調査を実施しましたが、設問が言葉で回答を求める形が多かったことから、統計的な集計、整理が出来ない結果となっておりました。このため、これまで、調査結果をお知らせしないままになっておりましたことに対し心からお詫びいたします。

ただ、会員の方々の会に対する貴重なご意見を頂戴いたしましたので、今後の会の活動の中に反映させていきたいと考えており、また、アンケート調査の中で、お知らせできるものは、報告したいと考えておりますので、ご了承いただきたいと思ひます。 広報部

◆ 投稿について

充実した野鳥だよりをとということで広報部をはじめ幹事一同努力していますが慢性的な原稿不足で悩んでおります。写真、イラスト、近況、調査結果、随筆、又野鳥でなくても動物、昆虫、植物のことなどなんでも結構です。どうぞお寄せ下さい。

〔北海道野鳥愛護会〕年会費 1,500円 (会計年度4月より) 郵便振替 小樽 1-18287

☎060 札幌市中央区北3条西11丁目 加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011) 251-5465